

夫れ造物者の配劑は、往々窮境難局に際して人智以外の妙を發すること多し。即ち此氷河に對する犂牛(ヤーク)は、實に天與の一妙機關たるを失はざるなり。矮身短足、全身長毛を以て包まれし彼は、一見山羊に似て山羊に非らず、容貌骨格、正しく一種の牛族たるも、唯普通の牛よりは、小且つ矮にして、殊に足の短きと、長毛垂れて地に曳かんとするを異にせり。其の歩行の緩漫なるは、宛ら蝸牛の遅々たるが如く、寧ろ歩行すると云はんより、却つて匍匐すと云ふの適切なるを覺えたり。然れとも彼が天賦の性質は、如何なる危路難道に臨むも、決して滑走顛躓すること無きものなり。

レ一帯の山間に住する土人即ち「ボツト」族は概ね此の犂牛を専用し、馱載、耕作共に之を使役せり。聞くならく彼の西道所謂「ギルギット」道よりするも、其の二三日間は、必ず彼の援助を受けざる可からずと。又此附近山中に産する一種の馬は、之を朝鮮馬に比すれば稍々大きく、通稱「カシミア」馬と呼び其の體軀の小なるに似ず、頗る靱強の性質を有すること、他地方の産馬に優る萬萬なりと雖も、所詮犂牛には及ぶべくもあらず。